自然に寒氣が強くて彼等の（寒さ除けの）術が信用を得ないやうな時には、彼等は之を誰かの所爲に歸して、その人を死罪に行ふ、彼等は人を眠らせて、その睡眠中に感知した所によつて占トをすることがあるが、また鬼神を自分の身體に乘り移らせて、占を賴む人々に答を與へることもある、その際には住居の中央に料理した肉を置き、巫は呪文を繰り返して唱へながら、手にせる太鼓で烈しく地を擊ち、遂に狂暴の狀態になつて自分の身體を縛らせると、この時鬼神は暗中に彼に乘り移つて來る、そこで、肉をとつて之に與へ、種々の問を發すると一々それに對して答をするのである」。これが Rubruck の記して居る所の概略であるが、Pian de Carpine や Marco Polo を初め、その他の人々の書いて居ることもほぼ同一であつて、此の外には主として種々の奇術を演じたり、病氣を癒したり、死人を呼び出したりすることなどを記して居るに過ぎないし⑭、漢史中に見ゆるものもまた此の範圍を出ない、そうして當時の蒙古人が巫を信ずることの深かつたことに就ては、史家ラシッド・ウドヂンの如きも之を記して、「今も成吉思の子孫の大部は彼等に對して最も固き信仰を有ち、重要なる事件は彼等に謀らずして行はるゝことはない」といふて⑮居る。蒙古以外の各種族の巫に關する斷片的の記載も、また能く之と一致するものがある、今はかゝる所行について一々史上にその例證を求めることは避けるが、少しく注意して見れば、かゝる事例の書き傳へられてあるものは少くない。要するに北方民族の間では、大小のことすべて巫の意見に基いて行はれたものと見て大した誤りはあるまい。

そこで注意せねばならぬのは、かく迄尊重せられた巫なるものは、彼等の社會國家の上に重要な役目を持つてゐたもので、その史上の出來事には深き關係を有するものではあるまいかとのことである。此等の民族に關した零碎